

岐阜奉行と岐阜町

眞理子
（岐阜市歴史博物館学芸員）

慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の戦いのあと、岐阜町（今の金華校区にほぼ当たります）は江戸幕府の直轄領となります。これは、斎藤氏から織田信長、そしてその孫の秀信の時代つまり関ヶ原の戦いまで城下町で、政治・商工業・長良川の水運の要でもあったこの地を徳川家康が直接つかむためだったと思われまます。岐阜町には美濃国奉行の大久保長安の陣屋が置かれました。美濃国は大小数多くの領主が所領をもち、幕府領も設定された地域でした。長安は美濃の幕府領を預かると同時に、法令の伝達・労働力の徴発などで美濃国内の他の領主を指示する立場でもありました。

城下町であった時代の城主の館は今の岐阜公園内にあり、信長の居館を発見するための発掘調査が現在続行中です。長安はそれとは異なり、韮屋町裏に新たに二つの建物を建てました。徳川家康・秀忠が岐阜に来たときに滞在場所となる御殿と、その南に隣接した長安の手代が執務する陣屋です。この敷地は今の岐阜市末広町・新桜町に当たり、伊奈波神社のすぐ北です。家康の九男である義直は尾張藩主となったのち、美濃国の中で四度にわたって領地の加増を受けました。岐阜町が尾張藩領となったのはその最後の加増にあたる元和五年（一六一九）のことです。当初は尾張藩の国奉行（町方と寺社領を除く地域の民政担当者）が岐阜町を預かり、長安の陣屋の地には尾張藩主が岐阜に来るときのための御殿が新たに造られました。寛永一六年（一六三九）からは、国奉行

の配下である大代官が岐阜町も担当するようになります。ただし大代官は町にいたわけではなく町政は古くからの町人の自治に任せていました。二代藩主となった光友の時代から、尾張藩の岐阜町に対する関心が高まりました。そのあらわれの一つが貞享二年（一六八五）の光友による伊奈波神社新社殿の造営で棟札には光友の名が記され、光友とその後継ぎ綱誠（つななり）の武運長久が祝詞に祈念されています（『伊奈波神社略誌』）。

博物館所蔵）に描かれた岐阜奉行所のようすです。二つの門をくぐった奥に奉行所があり、その両袖には白壁の塀が続き、側には同心の長屋がありました。敷地を囲む×は竹矢来でしようか。向かい（西）の「御宿」が賀島家で、奉行所南の四角い区画は誓願寺などの寺院、その南の道は伊奈波神社参道です。新任奉行が初めて岐阜町に来るときには、町役人は羽織袴姿で町の南口の木戸まで出迎え、その翌日に由緒のある町人と町役人が奉行所に出かけて挨拶しました。伊奈波神社職の塩谷氏は藩主にも御目見得をする家柄でしたから、このときのメンバーに入っていたはず。歴代奉行の中には評判の悪い人もあれば、温情派や能吏もいました。一九世紀前期に一八年間（歴代奉行のなかで最長）奉行を勤めた林八郎左衛門は名古屋の上層藩士に頼まれ、岐阜町人の所持金を奉行所で借り入れで融通しましたが、返済が滞っ

て町人が難儀しました。その一方、同じことを頼まれながら断った奉行もいます。林より少し前に赴任した大橋新六郎で、「自分は承知するが岐阜奉行が承知しない」と返答したと伝えます。しかし、林に比べて大橋は出世しませんでした。

も負けじと加勢していますから、厳しいなかにも慕われていたのでしょう。名奉行といえるのは、林と同時期に奉行となった寺尾次郎左衛門です。寺尾は長良川があふれそうになったとき町人を金華山に避難させて粥を与え、自分は現場で水につかって指図をしました。ちなみに、このころの金華山は一般の人が自由に入りにすることはできませんでした。また、天保の飢饉で生活に困る町人を助けるために、部下の反対を押し切って奉行所の備蓄金六〇両余をすべて町人に分け与えました。この温情を受けて岐阜町人は力を合わせて働き、役所のお救い金を辞退した者も多くなりました。それだけでなく、「町人救済に役立ててほしい」と七〇両もの金が町役人や奉行所のもとに匿名で届けられたのです。二人の対照的な奉行に対して、岐阜町民は林をなじり寺尾を誉める歌を作りました。

明治二年（一八六九）一二月に岐阜奉行所は廃止され、尾張藩の北地部宰という役所の一部局となりました。明治四年（一八七一）には藩が廃止され岐阜県が置かれます。奉行所跡地は宅地化され、芝居小屋の末広座や小学校が建てられました。現在では奉行所の建物などはすべて姿を消してしまい、痕跡さえ

うかがうことは難しくなっています。しかし、末広町・新桜町の区画は奉行所の敷地の名残であり、奉行所前の堀であった流れは今もたどることが出来ます。また末広町にある秋葉神社はもと奉行所の鎮守でした。伊奈波神社に参拝したあと、少し足を伸ばして散策してみたいかがでしょうか。

盃のさいをふる」と、黒田の名前とサイコロの目を掛けて皮肉った狂歌をよんでいます。しかし黒田はただ厳しいだけでなく、米が高値で生活が苦しい町人を助け、池ノ上村で長良川の堤防工事をしたときに自ら鍬を振るって采配し、岐阜町民

も負けじと加勢していますから、厳しいなかにも慕われていたのでしょう。名奉行といえるのは、林と同時期に奉行となった寺尾次郎左衛門です。寺尾は長良川があふれそうになったとき町人を金華山に避難させて粥を与え、自分は現場で水につかって指図をしました。ちなみに、このころの金華山は一般の人が自由に入りにすることはできませんでした。また、天保の飢饉で生活に困る町人を助けるために、部下の反対を押し切って奉行所の備蓄金六〇両余をすべて町人に分け与えました。この温情を受けて岐阜町人は力を合わせて働き、役所のお救い金を辞退した者も多くなりました。それだけでなく、「町人救済に役立ててほしい」と七〇両もの金が町役人や奉行所のもとに匿名で届けられたのです。二人の対照的な奉行に対して、岐阜町民は林をなじり寺尾を誉める歌を作りました。

